

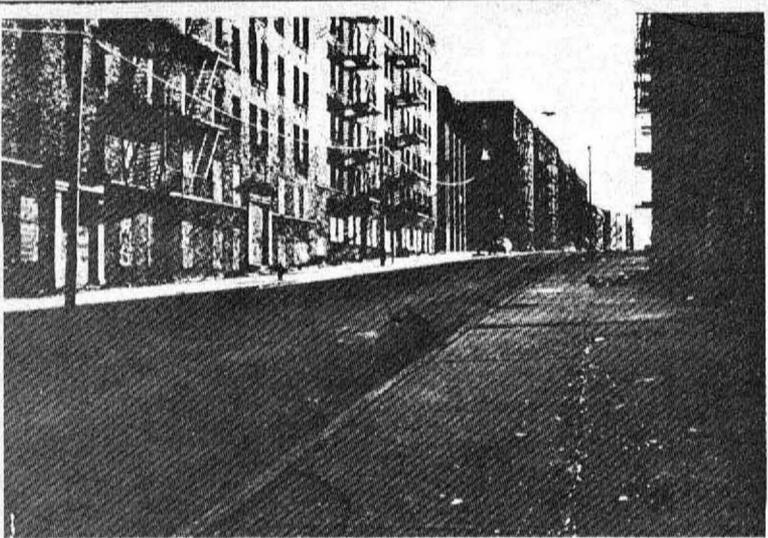
この世の下水

通じる角度から……

福岡 健 二

「生きる意味」を語られるとすれば、ちがうなと思ってしまう。今日の秩序にたくみに折りあいつけた計算をきかされていく気がするのだ。そうでなければ、イメージされている現実が、どうでもいところでどきどきかたり、また、だれにとっても切実であるはずの暗い部分がありすてられていたりする。私たちはもつとよれているのだ、破滅しやういのだ、「地獄」をかかえていっているのだと言いたくなってくる。

さびしいとき、生きているのがつらくてたまらないとき、美しいものがないのかも嫌っぱりに感じられるとき、いつも次のような問いが胸にわきおこってくる。この現実のどこをどう折れまがって、どんな姿勢で走っているなら、ほんとうの自分に出会えるのか？ 自分にむかってくる力をどんな角度で集約してはねかえせば、自分の表現（出会うべき自分をこの世界に登場させること）が可能になるのか？ しられた孤独がたおれこもつとする物語をどんな拒んでも、ひとりでのむこうから近づいてくる疲労と安易な結末、それをどうやってふりかき、ただ歩いていることがそのまま自分を奪いかえしていることになるのか？



こんなとき、走ってはいけなことはないわかっていても、知らぬまに走りだしている。この焦燥と不安を突きめけたところに吹いてくる涼しい風のなかにたしかかな信号を送りだすには、どうしたらいいのか？

少年期からずっとぶつかっている。いまだに解けない問い。性急すぎるし、抽象的すぎるし、具体的に現実を足をつかして存在している場所からみれば、上すべりした問いだとかたづけられるかもしれない。だれもが黙って耐えているしかな水面にいたずらに波紋をひきおこしているひとりよがりな若さをいつまでも始末できない、という性格的な悲劇が読まれるばかりなのかもしれない。なにが足りないのか？ ここにあるものが闇であるなら、この闇の奇怪さを十分にとらえることができないのだ。

立ちどまらなくてはならない。自分をたまたの石ころのようにおいて、この闇を吸いこむようにしてじっとしていなければならない。記憶のなから何年も会っていない友人のおおざめた表情が浮かびあがる。なにを言うために「彼」はあんなにも口を歪めていたのか？ 「彼」は世界を拒もうとしていた。意味を失った光をもつて訪れる朝を認めまいとどこまでも闇に沈みこむ姿勢でうつむいていた。「彼」とどこですれちがってしまったのかわからない。記憶の回路をつなごうとしているうちに奇妙な斜面をおりていることに気づく。にせの夜明けをのみこんで濁ってゆくこの世界の底を流れる暗い川へおりにいるのだとしよう。「彼」はそこにいて、この世界を拒もうとして、この世界の汚物にまみれた「彼の叫びをきくのだ。もつとも残酷な「彼」ともつともやさしい「彼」がおなじように酷使されて遠い遠くばった、そのことの意味を知るのだ。いやしい身ぶりにみちたこの世界をおりきったラディカルな言葉に出会わなくてはならない。

この世の下水はこことくおれの直腸へ集中するがいい／森理も密告もあたうかぎりの背信も／みんなゆるしてやるからおれの居間にはいつてこい

白井秀和の詩集「初冬降誕祭」（一九八〇）の「神学」という作品の一節である。この声をきくたびに私は生きる力へもつとも深いところから励まされるのをおぼえる。そうなのだ、「この世の下水」をおそれてはいけないうのだ。むしろすべての飛躍は、「この世の下水」を自分の内側にのみこむことから始まる。「この世の下水」にまみれることなくたのしむに幸福をうたっている者たちや、こすい処世に保証された教訓をたれる者たち、下半身を見失った高級な悩みや感傷をもてあそぶ連中にながわるといふのだ？

白井秀和は、この世界にむきあってこの闇を深々と呼吸する姿勢を私たちに教えている。あらゆる飛躍を結末のきまつた物語にひきずりおとそうとする「この世」の秩序を支配する神をこえるというモチーフによって、「この世」のゆるす物語の振幅をこえた領域におりようとしている。彼の居間には、この現実を生きて病む自分がその存在よりもひとまわり大きな倫理になって帰ってきている。私たちはそこに、存在の感じる不安がこの世界にとつて脅威であるような（否定の根拠）として登場しているのを見る。もちろん、この登場のしかたは十分なものではない。けれど、私ははぐれてしまっていた（「生きる意味」に出会ったような昂奮をおぼえた。このように「この世の下水」に通じる角度からなら、大胆に走りだしてははらずだ。

（白井秀和詩集「初冬降誕祭」は、豊橋市弥生町東豊和19-3にあるわ発行所に申し込み、共一六〇〇円で入手できる。）

ふくま・けんじ氏は
岡大教養部英語科教官

パパラギ
はじめて文明を見た南海の酋長

立風書房 580円

はじめて文明を見た南海の酋長
ツイアビの演説集

「パパラギ」 岡崎照男訳

その昔、ヨーロッパの宣教師たちがポリネシアの島々にやって来た。サモア島の人々はこの白い帆船を遠くから眺めて空に穴があいたのだと思ひ込み、その穴を通過してヨーロッパ人が来るのだと信じた。「パパラギ」とは「空を破って現れた人」——ヨーロッパ人のことを示しているのだ。

さて、その南海の孤島、ウポル島にツイアビという名の酋長がいた。背だけが2メートル以上もあつたがとておだやかで親切で人

うに生きるかということへのこだわりである。とくに後者は、作者自身の苛酷なアドレッセンスを色濃く染めぬいていたものであるとほくには思われて仕様がなない。そしてほくにはそのような印象を与えるこの作品の力は、佐藤泰志が、生活のレベルを裏切ることなく（時代）に下降しつつかわつてゆく緊張を、決して失うことなく生きていくことの正当な証しとなりていっている。ほくたちは自分の身のまわりにいるそうした人間の心を見えにくくして生きさせられている。母親、恋人、ほんとうに好きな友人……の心すら見えにくいのだ。粗削りに物語をかたるうまさにつまみ込まれながら読み進んでゆくうちに、ほく

きみの鳥はうたえる
佐藤泰志

河出書房新社 1200円

「君の鳥はうたえる」 佐藤泰志

苛酷さを強いられる青春の詩

私たちはあらためて、日常親しくしているすべての「隣人」たちの孤独と沈黙の深さに、ほんとうに気が持たせて出合っている。佐藤泰志と静雄が海水浴にでかけている間、かたくなに夏の路上にへばりついていようと思える。「僕は、本屋の同僚のゴキブリが単法な手口でやとったゴロツキ二人に徹底的になぐられ痛めつけられる。その激痛に、輪切りにしたレモン二枚を両目にあてて必死に耐えようとする。」「僕は」の想いは友人達のところへ届いている。しかしそうした孤独な行為をまっとうしようとしているその時に、「僕は」は、こんどは人生に徹底的に痛めつけられる。あたしたち一緒に（静雄と）暮すことに決めたという佐藤泰志の言葉、静雄の母親の発狂、天気の日がずっと続けばいいと言つて病院を

スナック・メルヘン

中央町サントリー・プラザ前
☎24-3786

君は知らず灰の底深く、さんぜんと輝く
ダイヤモンドの残らんことを……